

を聞かせて頂こうと期待していたのに、とうとうその年には三宅先生が出席されず良くわからないままになってしまった。たまたまその鑑定会の席上に新家 勝氏もお見えになってそのニシキキンカメムシの話を御聞きになり帰宅後調べたらニシキキンカメムシの幼虫と思われるものをその尼子谷にあった夫婦岩（今は無くなっているとか）のヤブツバキの葉上から得て所有していると（16-VII-1963）カラーの図送そえて御教え下さった。図の感じからすればニシキキンカメムシらしいのであるが見せて頂く迄何とも言えない。ただなんとなくこのあたりを調べる必要があることは事実である。

ただ、この谷のすぐそば西宮市の船坂地域の調査を1987年6回程したがアカスジキンカメムシが大変多くいる所で、成虫・幼虫共に採集できたが特に9月4日、9月11日（11日の方が多かった）何十頭と言う幼虫に出会ったりしている。同じ属の虫であり近い地点でもあるので、なんとか機会を見つけてそのあたりを調査出来たらと色々計画している次第である。

因にこのニシキキンカメムシは年1世代で5齢幼虫態で越冬し、4月中旬頃から5月上旬にかけて羽化。成虫は5月中、下旬に交尾、5月下旬から産卵活動を始め、遅いものは6月中、下旬まで続けられると。卵は食草の葉裏に14個の塊として産付けられる。孵化した幼虫は8、9月頃迄に5令幼虫となり秋には落葉下などで越冬に入ると（小野、近藤、1966）。

(SEP.1989)

<付記>

脱稿後高知県での本種の記録とその飼育記並びに美しいカラープレート付の報文が“げんせい”（高知県昆虫研究会々誌）第52号（1987年11月）第53号（1989年1月）に夫々発表されていることを知った。

アオドウガネの食草についての報告（続報その4）

新 家 勝

1989.8.4 西宮市田近野町。

背丈1.5メートル余りのウルシの幼木に、数10頭の本種が集まり、葉を食っていたもの。葉は葉脈だけになって葉柄ごと本種の重みで垂れ下がっており、葉脈でできた網袋にアオド

ウガネが袋詰めになっているといった感じであった。このウルシを食いつくした本種は、隣り合うネズミモチやアジサイの葉をも食べ始めていた。

1989.8.5 伊丹市西野七丁目

ヤナギの葉を食べていたもの。

武庫川でマルタンヤンマの産卵を目撃

新 家 勝

仁川合流点付近の武庫川は草むらに囲まれた水溜りがあり、ほぼ対岸の天王寺川合流点付近も流れの極めて緩やかなワンドがあるので、武庫川におけるトンボの豊庫になっている。1989.8.6にこの辺りを見回っていたところ、天王寺合流付近のワンド（尼崎市西昆陽四丁目）で1♀が産卵しているところを目撃した。

クロオビシロタマゾウムシの産地

高 橋 寿 郎

本誌前号で (p.44-45) クロオビシロタマゾウムシ *Cionus latefasciatus* Voss の分布は原色日本甲虫図鑑 (Ⅳ) では四国となっているが、本州新記録として辻 啓介氏が兵庫県氷の山で採集、記録されているのがある (きべりはむし Vol.1, No.1/2, 1972) むね紹介したが、本種はもっと前に岸井尚博士が新潟県粟島で採集記録されておられることを同博士からわざわざ御教示下されると共に、その所のコピーをお送り下さった (あきつ Vol.10, No.4, p.12, 1962)。文献を十分に調べなかった筆者の不注意であったので此処に訂正させて頂く。御教示下さった岸井博士に厚く御礼申しあげる。